

## ①五稜郭

### ■武田<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎の妻

1854年3月31日、江戸幕府とアメリカ合衆国が日米和親条約を締結した。

アメリカが、東アジアとの貿易の為に太平洋航路が必要だったからであり、航路上での人身保護と物資の補給を目的とした条約だった。

それでも、箱館は、長い鎖国の歴史を破り、開港された。

ロシアの南下によりロシア船が頻りにみられるようになった、1799年、幕府は防衛力を強化する為に函館に奉行所が必要と1802年、函館奉行所（当初蝦夷奉行所）を置く。

条約が結ばれたことにより、より防衛力の強化が必要となり、将軍、徳川家定は、函館周辺を幕府直轄地とし、築城を命じた。

設計を担当したのは洋式軍学者の武田斐三郎。

大砲による戦闘が一般化していたヨーロッパの<sup>りょうほしき</sup>稜堡式の築城様式を採用し、<sup>とりで</sup>堡を星型に配置した。総面積、74,990坪（約247,466m<sup>2</sup>）。

当初は外国の脅威に対抗する為の築城という大義だったが、開港即攘夷とはならなかった。外国人居留地の計画も失敗し町中に外人が混在する状態になり、外人が身近になり人々の脅威が薄れていく。

すると、予算がない事もあり国家の威信を示す為の築城と趣旨が変わり、築城規模は縮小される。

武田<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎（1827 - 1880）は伊予大洲藩（愛媛県大洲市）出身の学者、陸軍軍人。

緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、江戸で佐久間象山から洋式兵術を修業する。

そして、従来の築城の発想を塗り替えた日本初の洋式城郭「五稜郭」の設計に才を発揮した。

その他にも、日本初のストーブを考案したりと、多才だった。

諸外国の優れた考えは、取り入れ、解析し、作ると学んだ。

外国に負けない。という信念の持ち主で、見るだけで作ってしまうと周囲を感嘆させる技術者であり、科学者だった。

<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎は大洲城（愛媛県大洲市）と肱川をはさんだ対岸にある中村で生まれた。

甲斐武田家を祖とし、大洲藩加藤家に、仕えた。当時は、武田の名を出すことなく竹田姓を名乗った。

兄、<sup>ゆまたか</sup>敬孝も秀才で、孝明天皇に仕え、維新後は、宮内庁に入り西郷隆盛から厚く信頼される。

兄に倣い、大洲藩校・明倫堂に通い、母親の実家で漢方医学を学んでいたが、22歳のとき藩主に願い出て、大坂の緒方洪庵の適塾で学び、オランダ語を習得。

2年後、洪庵の紹介で江戸に出て、伊東玄朴から英語・ロシア語を学び、佐久間象山から兵学、砲学を学んだ。特に、航海、築城、造兵に興味を持ち、猛勉強した。

<sup>みつくりげんぼ</sup>箕作阮にオランダ語を教えられ磨きをかける。

天才的頭脳の持ち主ながら、努力家でもあった。

あまりに優秀だと、幕府に旗本待遇で召し抱えられる。

ペリーが来航した時、象山に連れられて吉田松陰たちと共に浦賀に行って黒船を見ている。すると、幕府からの出仕命令が来た。

それは、長崎でロシアのプチャーチンとの交渉していた幕府側の通訳をするためだった。

うまくこなす。

江戸に戻ると、1855年、こんどは樺太出張を命ぜられ、箱館でペリーと会談した。

1年前から興味を持っていたことで、張り切って通訳を務める。

ペリーは武田<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎の学識の深さを褒め称えて、日本人侮れずの思いを持つ。

以後、斐三郎は箱館に10年間滞在する。

開港後、函館は、外国人が多数訪れ、諸外国との交渉が出来得る最優秀な人材が必要不可欠だった。斐三郎はその中心にいた。

1856年から五稜郭の設計を任せられ、自信を持って壮大な設計をし、着工するが、思い通りにはいかない事も多かった。

1864年完成。1866年付帯工事も完成することになる。

慣れない函館の地で、有り余るほどのなすべき仕事があり、緊張と責任感で張りつめていた斐三郎<sup>あやさぶろう</sup>を迎え入れ泊めたのが、町名主、小島家だった。内潤町（函館市末広町）で雑貨酒類を販売する裕福な商家だった。

当主、小島又次郎は、外国人への関心が深く勉強しており、<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎を尊敬し、宿泊するよう願ったのだ。

そして、斐三郎 28 歳は、その娘、小島美那子と出会い、心惹かれる。

美那子はまじかに外国人を見て驚くことばかりだった。その外国人との交渉を堂々と果たす<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎に憧れ、公私にわたって手伝う。

<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎は、たちまち恋に落ち、子が出来、結婚となった。

小島又次郎は大喜びだ。

函館奉行所は事の次第を聞き、旗本並みの要人、<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎に似合いの女人とするために、美那子を役人、梨本弥五郎の養女とし、家格を合わせ嫁がせた。

最高の伴侶を得た<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎は、ずっと考えていた後輩の育成に乗り出す。

1856 年、奉行所に願い、諸術調所（洋学、兵学の研究教育機関）を設立する。

今まで学んだことをすべて教えると張り切る。

大学並みの教育をしていくが、すべてを一人で教える一人教授の学校だ。

そして、生徒と共に、国産帆船「亀田丸」を操り、ロシアの黒竜江に日本初の修学旅行に出かけた。

榎本武揚や前島密や井上勝なども彼に学んだ。

生徒はすべて寮で同じ生活をし、身分貴賤を問わず、すべて学術の成績で上下を決めた。

順調で充実した暮らしだったが、1863 年、美那子と死別。

美那子をなくすと函館に住まいする意欲を失い、五稜郭普請の目途も立ったと、江戸に戻る。

江戸開成所教授や大砲製造所頭取に任じられ、日本を代表する学者となる。

そして、西洋学問の第一人者、佐久間象山（1811-1864）と再会を果たし、再び師事する。

自信過剰で傲慢な象山とは、以心伝心を通じるところがあり、師であり親友でもあった。

そして、象山から紹介され信濃国松代藩に縁のある大塚高子と出会い、恋し、再婚した。

ここで新たな出発が始まり、力がみなぎる。

だが、象山は、翌年、殺される。衝撃が大きかった。

<sup>あやさぶろう</sup>斐三郎は、権力志向はなく、ただひたすら、科学者であり教育者であり続けたかった。

家庭を大切に、日々の暮らし・友人との楽しい語らい・豪放な宴が大好きだった。  
だが、それだけでは生きていけない世の中となったと知る。

1868年、大洲藩が討幕派だったため、幕臣のあやさぶろう斐三郎の身にも危険が迫り、大塚高子の伝手で、信濃国松代藩屋敷に匿われる。  
そこで、自由に思いのままに学ぶ暮らしもよかった。

だが、明治政府が出来ると、ほうっておかなかった。  
兵部省に出仕し、科学技術方面の指導者として活躍せざるを得なくなり、明治政府の国家づくりにまで関わっていかざるを得なくなる。  
陸軍士官学校の創設の任を担う。

この間、妻、大塚高子が亡くなる。  
愛する妻の死はつらかったが、子たちもおり、家の要は必要で、妻の縁者、西村仲子と再々婚する。  
だが、一から家庭を作っていく事になり、緊張とときめきがあるが、気を遣う日々となる。  
あやさぶろう斐三郎には、ときめきはうれしいが、その時は過ぎており忙しすぎて余裕はなかった。  
3度目となる心安らぐ家庭づくりは、負担が大きかった。  
妻が生きていてくれたらとの思いは強い。  
まもなく、1880年、激務による過労死となる。53歳だった。  
妻を、家族を、愛し、日本人としての誇りを持って真面目にまっすぐに生きた人生だった。

#### ■ ひじかたとしぞう土方歳三の恋

あやさぶろう斐三郎と対照的な生き方をした五稜郭を彩る偉人に、ひじかたとしぞう土方歳三（1835-1869）がいる。  
ひじかたとしぞう土方歳三は夢に生き、夢の中で亡くなった短い34年の生涯だったが、思い通りに夢を実現した幸せな生涯だった。  
だが、伴侶となる女人に出会うことはなく、花街での東の間の逢瀬のみの、命を懸ける恋のない寂しい女人との付き合いで終わった人生だった。

ひじかたとしぞう土方歳三の人生を大まかに3つに分けると。  
武士を夢見るやんちゃで、乱暴者の少年・若者だった時。

近藤勇と出会い、彼を大将（大名）にするために生きた時。

近藤勇を乗り越え、自らが大将となり武士としての人生を全うすると覚悟した時。となる。

1835年5月31日、天領だった多摩（東京都日野市）で裕福な農家に生まれる。

自由闊達、剣術好きで、勉強の良くてできる子だった。天領ゆえに幕府への思い入れは深い。

1844年、姉、のぶが、日野宿名主、佐藤彦五郎に嫁ぐ。

1849年、日野に大火が起き、暴徒が出て、命の危険を感じた佐藤彦五郎が、自宅に剣道道場を開く。

ひじかたとしぞう土方歳三14歳は、居場所を見つけたと大喜びで、夢中になって剣の腕を磨く。

1850年には、ひじかたとしぞう土方歳三より7か月年上の近藤勇が出稽古に来た。

我流ではない、剣道の奥の深さを見せつけられ、魅せられ、正統な剣道を学ぶと決める。

それからは、近藤勇から、天然理心流を学び、この人こそ、大成すべき人だと確信する。

この間、ひじかたとしぞう土方歳三は、江戸に奉公に出るが、勤まらず実家に戻り、秘伝の「石田散薬」の行商に出たりしながら剣の腕を磨いていた。

幕末の不穏な空気が漂う中で、江戸で多感な時期を過ごし、幕府を守る武士になる決意をますます強めていく。

幼い頃から、勉強のできる環境で育ち、賢い子だった。

寺子屋での勉強、家では蔵書も多くあり兄姉からも教わる。

また、親戚に谷保村（国立市）の名主、本田覚庵がいた。

本田覚庵は、医者、書家として近在に知られた文化人で、家に通い、漢学・書道を習う。

武士として身に付けなければならない必修の教養だと、必死で学んだ。

ひじかたとしぞう土方歳三は、24歳となり、近藤勇と出会って10年近く経ち、近藤勇の道場、試衛館に入門すると決める。近藤勇と共に歩む決意の表れだ。

江戸牛込（東京都新宿区）の試衛館に通い始める。

近藤勇は、1860年、願い続けていた武家の娘、松井ツネと結婚する。

そして、天然理心流宗家を継ぎ、道場の主催者となり、武士への道がほぼ出来ていく。

<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三は、近藤勇の片腕となっていた。

そして「武士よりも武士らしく生きる」を信条に、近藤勇を支える決意を固める。

1862年、幕府は、要人警護のために、浪士募集を決める。

剣術に自信のあるものならば、身分を問わず召し抱えるという画期的な募集だった。

1863年2月4日、近藤勇・<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三らが試衛館の仲間を引き連れ応募した。

小石川伝通院で総勢234名となった浪士隊が結成された。

すぐに、将軍、家持警護のために、京に向けて出立。

朝廷より「新選組」の名を得て、会津藩主、松平容保より市中見回りを昼夜行うことを命じられる。

死を掛けた危険な任務故、潤沢な資金が与えられる。

顔良し・スタイル抜群・男らしさがきらめく<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三のモテモテの時が始まる。

同時に、近藤勇に権力を集中させ、京を警護する新選組の威光を高める為、<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三の本領発揮の時となる。

新選組の厳しい規則をつくり、規則を破った者を容赦なく切腹させた。

敵を殺した数よりも、身内で掟を破った者を殺した数の方が多いと言われるほどだ。

こうして新選組の主流となり、身内で幹部を固め、9月ごろには、新選組局長、近藤勇・副長、<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三が就任し、定着させていく。

<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三は「鬼の副長」として皆に恐れられる。

<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三は、新選組を幕臣にし、近藤勇を大名とすると目標を定めている。

この大義の為には何をしてもよいという考えだ。それが幕府にとっても有用だと確信している。

<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三自身も、武士以上の武士になり切って働いた。

潤沢な資金を得て、酒宴・遊興・隊士集めと忙しい。

1864年6月5日、池田屋事件となる。

新選組の名は天下にとどろき、褒美の金品も出た。

ひじかたとしぞう  
土方歳三がしたことは、手柄を新選組が独り占めする為に力を発揮しただけだが。

こうして、1867年6月、新選組の幕臣取り立てが決まる。

ひじかたとしぞう  
土方歳三の願い通り、新選組は武士になった。

だが、10月には、将軍、慶喜が大政奉還し、政権を担う徳川幕府は終わった。

12月9日、慶喜は征夷大将軍職を辞し、朝廷は王政復古の大号令を宣言し、軍事の統括権もなくし、徳川幕府は正式に滅んだ。

ひじかたとしぞう  
土方歳三の思い描いた武士はなくなり、天皇が率いる世になってしまった。

新選組は朝敵となった慶喜に従い続けるしかない。

そして、1868年始め、鳥羽伏見の戦いが始まる。

負傷し戦線を離脱した近藤勇に代わり<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三が指揮するが、新政府軍に敗れた。

慶喜ら幕府の首脳陣は、江戸に逃げ戻り、新選組も江戸に戻る。

ひじかたとしぞう  
土方歳三は剣で勝てる戦いは過去の事だ。これからは、洋式軍備なくして勝利はないと、洋式軍備の必要性を実感していた。

江戸では、幕府がフランス式調練を取り入れており、フランス陸軍の指導を受け猛烈に勉強を始める。

1月中には洋式軍服を受け取り、受け取った洋式軍服を着て、写真を撮る。

戦いやすい洋式軍服が気に入った。

皆に広めたかったが、すでに、新政府軍がはるかに先を言っていた。

江戸では、慶喜の警護が役目だった。

だが、2月28日、勝海舟から、甲州の治安を守るよう命じられ、200名あまりを引き連れ甲府城に入り、守ろうとするも、逃亡者が相次ぎ、新政府軍は強く失敗する。

その間、江戸城は無血開城された。

主戦論の<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三を江戸から離す計画に、はめられたのだ。

ひじかたとしぞう  
土方歳三は江戸での華々しい戦いを考えていたがかなわず、潜伏後、旧幕府軍と合流し、宇都宮で戦い、負け続けて、会津に向かう。

4月25日、囚われていた近藤勇が斬首。

ひじかたとしぞう  
土方歳三は何のために今まで頑張ってきたのかと落ち込む。

幕府を支える武士として、武士より武士らしく生きると、規律を厳しく守らせ鬼となったが、守るべきものがなくなったと実感する。もはや勝利はないのだ。

会津を死に場所と決め、迎え撃つ布陣を整える。

ところが、会津藩勢はあっけなく負けた。

ここから、米沢に向かい、仙台青葉城に入り、徹底抗戦を訴えるも、伊達藩は拒否。

やむなく、榎本武揚率いる艦隊に総勢 2300 名が乗り、函館を目指す。

10月26日、五稜郭に入る。

すぐに、松前城に向けて進軍。松前城を占拠する。さらに、松前藩兵を追撃し勝利する。

ひじかたとしぞう  
土方歳三は指揮官としての力を見せつけた。

松前藩を追い出し、共和国政府を樹立する。ひじかたとしぞう土方歳三は大功労者だった。

こうして、総督、榎本武揚以下、8人の幹部の一人に、ひじかたとしぞう土方歳三が選ばれる。

近藤勇を亡くし、独り立ちしたひじかたとしぞう土方歳三だったが、長年の思いが実った。

喜ぶひじかたとしぞう土方歳三ではなかったが、死に場所を見つけたと安堵し、責任感が満ち溢れる。

いい気持だった。

新政府軍を相手に、要職、陸軍奉行並、ひじかたとしぞう土方歳三は、名に恥じない、軍功を数々上げる。

だが、兵力の差はどうしようもなく、1869年6月20日、狙撃され戦死 34 歳。

ひじかたとしぞう  
土方歳三は、納得できる思い通りの生涯を送り閉じた。

女人遍歴の面から見てみると。

近藤勇と共に生きると決意するまでの恋を積極的に明らかにしていない。

誇るべきことはなかったようだ。

奉公先での醜聞。



上洛前にお琴と許嫁となった。お琴は戸塚村にある三味線屋の娘で、評判の美人。三味線の調律から演奏もこなし、長唄は名取だった。

<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三の兄・為次郎が取り決めたことであり、<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三の思いは残っていない。

吉原にある火炎玉屋の黛太夫との浮名も有名だが、黛太夫の自慢話っぼい。

京に入ってからが、<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三が自慢できる遊興の日々だった。

江戸の吉原と並ぶ花街、京の島原（京都市下京区）では、花君太夫、天神、一元、などをなじみとした。

彼女たちは、和歌や俳句、能楽、歌舞伎など文芸の教養が深く、芸を売る女人でもあった。京の文化の中心を担っている心意気もあった。

花君太夫は、中岡慎太郎の馴染みでもある。

花街に敵味方はなく、入り組んだ関係で、中立を保っていた。

<sup>ひじかたとしぞう</sup>土方歳三は宴を開き華やかに遊ぶが、気を許すことなく、情報収集を第一とし、新選組での権力の確立の為に生かしており、将来に向けて、生涯続く恋をする気はなかった。

緊張感があったが、激しく大きい戦いがあるわけではなく、基本的には、暇人で、謀略で権力を固めていく京での暮らしであり、そのための花街だった。

お茶屋遊びは、打ち合わせにも、各方面への友好を深める為にも、密かにうわさを流す為にも、価値あることだ。

庶民的な花街、

祇園（京都市東山区）では、芸妓三人程。

北野（北野天満宮の門前町）では舞妓、君菊・小楽。君菊との間には女の子が生まれ、夭折。

大坂新町（大阪市西区新町）では、若鶴太夫、外二三人。

北の新地（大阪市北区）にも、多くいた。

潤沢な資金があったことを物語り、多くの同志を追い詰め殺し気が滅入ることも多く、気分を晴らし大義に向けて英気を養う必要もあり、仲間と共によく遊ぶ。

近藤勇が力を落とし、土方歳三<sup>ひじかたとしぞう</sup>が先頭立って戦うようになると、責任感と、勝利の為に、茶屋遊びを止める。

近藤勇が死ぬと、女人との関係も断ち切った。

俳句が好きでよく創っている。素直な心情がにじみ、楽しくひょうきんな人柄が表れている。

辞世の句とも思える句が

早き瀬に力足りぬか下り鮎

梅の花咲ける日だけにさいて散る

しれば迷いしなければ迷はぬ恋の道

春の草五色までは覚えけり

梅の花 一輪咲いても 梅は梅

来た人にもらひあくびや春の雨

「鬼の副長」が、真実の姿でないことを物語る。